

「おまんこ」ぼくの魔女

井ノ上



この日本語版グレイデイド・リーダーはJGR
プロジェクトグループが開発した試作品です。
販売を目的としたものではありません。この日
本語版グレイデイド・リーダー、及び、JGR
プロジェクトグループに関するお問い合わせは、
igrprj@hotmail.com へお願いいたします。

© 2003 by JGR プロジェクトグループ

絵 え
書 か
き 換 え
え

原作
げんさく

ハイン・クヨシ

宮崎 妙子
みやざき たえこ

久米 梓
くめ ずき

とよつなほくの魔女
まじょ

登場人物
とうじょうじんぶつ

野崎竜彦・会社員
のさきたつひこ かいしゃいん
32 歳
さい

野崎保子・竜彦の母
のさきやすこ たつひこのはは
58 歳
さい

萱島ゆう子・7歳・魔女？
かやしま ゆうこ さい まじょ

萱島千絵・ゆう子の母
かやしま ちえ はは

萱島登美子・千絵の母
かやしま とみこ はは
60 歳
さい

萱嶋将之介・千絵の父
かやしま 将之介 ちえのちち
ゆう子の祖父
ゆうこのそふ

萱島源之丞・千絵の弟、ゆう子のおじ

キヤサリン・萱島源之丞の妻、26歳

部長・竜彦の会社の人

藤沢ゆかり・竜彦が結婚したい人

場所・日本（北海道・九州・成田空港）

アメリカ（オレゴン）

へ行ったり、左へ行ったりしながら滑り続ける。

（魔女……。ゆう子の大切な人は死ぬ……。ゆう子の好きな人は死ぬ……。

ゆう子は魔女か？ ぼくは死ぬのか？ 魔女、魔女、魔女。）竜彦の頭の中を魔女ということ

ばが走った。車は止まらない。右へ、左へ滑り続ける。真っ白な道の向こうから大きい

車が走ってきた。

「おじさん！ ーわいー！」ゆう子がおおきい声で言った。

「あつー！」竜彦は大きく目を開けた。（ゆう子。ゆう子が魔女……。魔女？ ゆう子は魔女じ

やない！ ゆう子はぼくの子供だ！ ぼくは、ゆう子に責任がある。ぼくはゆう子に責任を持たなけ

ねばならない。ぼくは……。車を止めなければならない！）竜彦は強く思った。

「大丈夫だ、ゆう子。ぼくたちは死なない！」

終

「おじさん、おじさんが結婚しても、私はおじさんといっしょにいてあげる。」
「はい、ゆう子。ぼくの子供になれ。もう、どこへ行くが。」と言つて、竜彦はやさしくゆう子
の顔を見た。

「へん。」とゆう子は竜彦の顔を見てうれしそうに笑つた。竜彦はゆう子の顔を見ながら、左
の手でゆう子の手を取つた。ゆう子はその手を両方の手で強く握つた。

その時、車が滑つた。

「おじさん、へい！ 前を見て運転して！」

車は滑り続ける。竜彦は、両方の手で運転しようとするが、ゆう子が竜彦の左手を強
く握つている。ゆう子は、こわくて竜彦の左手をもつともつと強く握る。

車は、滑っている。竜彦は車を止めようとするが、止まらない。車は、止まらないで右

(1)

男の人と女の子は親子だろうか？

女の子のお母さんはどこにいるのだろうか？

北海道の5月。日曜日の夕方。夕方の赤い空の下を車が走っている。赤い車も
黒い車も白い車も走っている。

白い車を運転しているのは野崎竜彦、2歳。青いTシャツにジーンズをはいている。

竜彦の隣には、萱島ゆう子が座っている。ゆう子は、目が大きく、色の白いがわいて、歳
の女の子だ。

「ねえ、おじさん」とゆう子は運転している竜彦に話し掛ける。「私のお母さんと結婚し
たい？」
「へん。」
「どうして？」

「ゆう子ちゃんのお母さんが好きだから。」

「そう……。じゃ、私は邪魔ね。」

「邪魔？ 邪魔じゃないよ。ゆう子ちゃんのようなかわいい子供がぼくの子供になってくれたらうれしいな。どうして邪魔だと思ってるの？」

ゆう子は竜彦の質問に答えない。

「おじさん、おじさんはお金持ち？」

「いや、金持ちじゃない。でも、一生懸命働いてゆう子ちゃんとお母さんを幸せにするよ。」

「お母さんも私も、今、幸せよ。おじさんはお金持ちじゃない。じゃ、お母さんは考えなければいけない。」

「なにを考えるんだ？」

「そうだ。今晚は、おいしいものを食べた後、その人といっしょにホテルに泊まるらしい。」

「おじさんは？」

「ぼくはアパートへ帰る。明日はぼくのお母さんのところへ行く。」

「おじさんのお母さん？ あ、北海道の病院に来てくれたおばさん？」

「そうだ。ぼくのお母さんだ。ぼくのお母さんの家でいっしょにお正月をしよう。」

「会社の女の人もいっしょに行くの？」

「行きたいと言ったら、いっしょに行く。」

「おじさん、その人と結婚する？」

「もしゆう子とその人が好きだったら、結婚する。」

「私？ その人を好きじゃなかったら？」

「ゆう子が好きじゃなかったら、しないよ。」

竜彦は頭を振って、目を大きく開けて前を見た。車の外は真っ白だ。

空港には人がたくさんいる。「おじさまん！」たくさんの人の中から、ゆう子^こが走ってきた。そして、竜彦の胸に飛びこんで、大きい声で泣き始めた。

「ゆう子、お帰り。もう大丈夫だ。」竜彦はゆう子を強く抱いた。

雪が降り続けている。真っ白な雪が次から次に降ってきて、前がよく見えない。

車を運転する竜彦の隣にゆう子が座っている。

「おじさん、おなかすいたよった。」

「そうか？今日はホテルのレストランでおいしいものを食べよう。会社の人といっしょだけれど、いい？」

「その人、女の人？」

「おじさんはお金持ちじゃない・・・から、お

金がほしい。だから、お母さんと私は保険

をかける。そして、保険のお金をもらうために

私とお母さんを殺すかもしれないですよ。」

竜彦は驚いてかわいい顔のゆう子を見た。

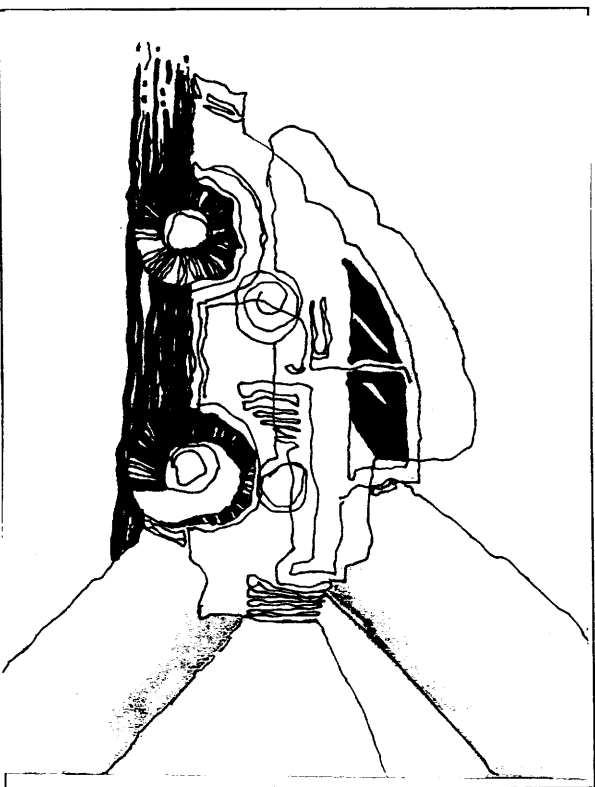
「おじさん！前を見て運転して！あぶない！」

竜彦は前を見て、言った。

「君は、おじさんがそんなことをすると思っ

てるの？おじさんは保険の金がほしいから、保

険金のためにお母さんと結婚する。結婚し



「お母さんとゆう子ちゃんに保険をかける、そして、二人を殺す。保険金をもらうために。」

「そんな人がいたでしょう。テレビのニュースで見たよ。」

「ああ、ひどい人がいたね。でも、君は、おじさんとその人が同じだと思っているの？」

ゆう子は答えない。何か考えているようだ。

「おじさん。」とゆう子は言った。「お母さんは何と言っているの？お母さんもおじさんと結婚したいと言っている？」

「いや、お母さんはまだ迷っているようだ。お母さんは心配なんだよ。ゆう子ちゃんがぼくを好きかどうか、お母さんは心配している。だから、結婚するかしないか、迷っているんだ。」

「そう・・・お母さんは迷っている・・・。もしわたしが、お母さんの結婚はいやだと言ったら？」

(どうしてゆう子は幸せな生活ができないのだろう。次から次に困ったことがおきる。



お母さんの千絵が死んだ。おばあさんの登美子
が死んだ。千絵の弟の源之丞がいなくなっ
た・・・。ゆう子の大切な人が次から次に
いなくなる。どうしてだろう？ ゆう子の大切
な人、ゆう子の好きな人。うん、そうだ、ゆう
子の大切な人はみんないなくなる・・・、み
んな死ぬ？ ゆう子に好かれたら、死ぬ？ じゃ、
ゆう子は魔女？ 魔女のような女の子？ 魔女
に好かれた人は死ぬ・・・。ゆう子に好かれた人
は・・・。じゃ、ぼくも？)

「おりがどう。ホテルの部屋も予約した。」

「ええ。」

「申し訳ないけど、今晚はゆう子と二人で泊まつてくれなう。ぼくはアパートに帰る。」

「いいわ。ゆう子ちゃん友達だよね。いい機会よ。」

「いい機会。おりがどう。じゃ、ぼくはこれから空港へゆう子を迎えに行く。飛行機は16時

30分に着くから、6時半にホテルへ行けると思う。」

「雪が降っているわ。道が滑るから危ないわ。運転に気を付けてね。」

(12)

ゆう子はこれからいなくなるのだらう。

竜彦はゆかりと普通通の幸せな結婚ができるだらうか。

それとも・・・。

「どうしたら、お母さんは結婚しないよ。」

「じゃ、おじさんばしする？ 私を殺す？ 私がいなかったら、お母さんは迷わない。お母

さんが迷わなかったら、おじさんはお母さんと結婚できる。だから私は邪魔。邪魔な私

を殺す。」

「何を言っんだ。ゆう子ちゃん、お母さんの大切な大切な子供だよ。」

ゆう子は何も言わなかった。車の中は静かになった。

「おじさん」とゆう子はまた話しかけた。「お母さんに電話したらいいよ。ゆう子返して

ほしいか？ ゆう子返してほしかったら、ぼくと結婚しろ。」

結婚しなかったら、ゆう子返さないと云えばいいよ。」

「いいんだよ。結婚できなくても。無理ならしかなかったらいい。」

「え？いや、おじさんは、お母さんを愛していないの？」

（いやな子供だな。子供がいると結婚はむずかしい）と竜彦は心の中で思った。

「おじさん」とゆり子はまた口を開いた。「お母さんと結婚して赤ちゃんが生まれたら、私が邪魔になるでしょう？赤ちゃんがかわいいから。」

（7歳の子供が何を考えているのだろう？）竜彦は、いなくなった。

（こんなにかわいい顔をしているのに、頭の中で何を考えているのかわからない。）

運転しながら、竜彦は思った。（この子を育てた千絵さんを、ぼくはよく知っているのだろ

うか？千絵さんと結婚して、ぼくたちはいい家族になれるのだろうか？）

これまで、ゆり子の母・千絵と結婚したいと思っていた。けれど、今、千絵との結婚を迷い始めた。

「二日も寝ていないのに、空港まで車で行って大丈夫？運転できる？」とそばの女の人が言った。

「大丈夫、大丈夫。じゃ、みなさん、さようなら。」

「運転に気をつけて。」と女の人が言った。

部屋を出た竜彦はポケットから携帯電話を出し、ボタンを押した。

「もしもし、ゆかりさん。野崎です。今日のホテルの予約はできています。」

「ええ。この前行ったホテル。レストランは1時半から。」

「悪いけど、三人で食事したいんだ。ゆり子がアメリカから帰ってきた。」

「あら、そう。クリスマスのお休み？ホテルは大丈夫だと思うわ。ホテルに電話をして、

食事は二人じゃなくて三人だと言わう。」

なようにしてほしい。』と言った。そして、その夜、一人で車椅子で出かけたの。」

「うん・・・。」

「ギヤサリンは『私が悪かった』と言って泣いていたの。『源之丞は帰ってこないかもしれない。私が離婚したいと言ったから、帰ってこないにちがいない。』と言った泣いていた。私はギヤサリンの家に、源之丞おじさんのいない家にいることができた

いから、日本に帰ってきたの。でもおじいちゃんのことろへ行けない。おじいちゃんは何もわからなくなってしまった。私、行くところがないの。おじさん、迎えに来て・・・。」

「おかつた。行くよ。行くから、ゆう子、心配しないで北海道へ来い。」

「うん、おじさん、おりがどう？」

電話をきいて、竜彦はまわりの人に言った。「ぼくの子供が帰ってきた。アメリカから帰ってきた。今から、空港へ迎えに行きます。」

あたりは暗くなり、走る車はみんなライトをつけている。竜彦の車もライトをつけて走っている。車の中で、ゆう子は寝ている。竜彦の車は、小さい家が並ぶ住宅街に入ってきた。そして、小さい庭のある家の前で止まった。竜彦はゆう子を起こし、「そろそろ家に着いたよ。」と言った。ゆう子は目を開けた。「どうもありがどう、おじさん。楽しかったね。まだ、行っね。」

入ってきた。そして、小さい庭のある家の前で止まった。竜彦はゆう子を起こし、「そろそろ家に着いたよ。」と言った。ゆう子は目を開けた。「どうもありがどう、おじさん。楽しかったね。まだ、行っね。」

「いや、もう行かない。さ、車を降りて家に入りなさい。」

「おじさんは、お母さんに挨拶しないの？『こんばんは』と言わないの？」

「言わないよ。もう遅いから。はやく降りて家に入りなさい。ミミで見ているから。」

「でも、おじさん。」とゆう子が言った。「私が家に入ったら、悪い人がナイフを持って、お母さんに『金を出せ』と言っているかもしれないわ。そうしたら、おじさん、どうする？」

お母さんに挨拶しなければいけないわ。『だだいま、今、帰ってきました。』と言わなければいけないわ。」

「わかった、わかった。挨拶しよう。『帰ってきました』と言おう。今夜が最後かもしれないから。」

竜彦は車を降りて、小さいゆう子の手をとった。

(小さくてやわらかい手だな。) 竜彦の心が優しくなった。

「どうして？」

「家を出たまま、帰ってこないの。」

「家を出たまま帰ってこない？どうして？」

竜彦の大きい声を聞いて、部屋の人々はみんな竜彦を見た。

「キヤサリくんが離婚したいと言ったの。源之丞おじさんの足はよくなりそうなの。歩くことができるそうなの。だから、キヤサリくんは、『源之丞おじさんが好き。でも、源之丞おじさんといっしょに生活できない、離婚したい』と言ったの。キヤサリくんは『私はまだ6歳で、まだまだ若い。これからしたいことがたくさんあるから、歩けない人の世話ができない。だから離婚したい』と言ったの。」

「それで、源之丞さんは出ていったのか？」

「そう。源之丞おじさんは、『キヤサリくんの気持ちはよくわかる、ぼくは大丈夫だから好き

「おひしひ、おひしひ。おひしくて毎晩、泣いているよ。」と竜彦は全然おひしひがせせん
に言った。

「おじさん、おひしひでしよう。だから、私、帰ってきてあげた。」

「えっ。」

「今、成田についたところ。これから北海道行きの飛行機に乗る。１６時３５分に着くか
ら、おじさん、迎えに来てくれる荷物があるの。」

「なんだって？ ゆづ子、キヤサリが『日本へ帰れ』と言ったのか？ とっつしたんだ？」

「おじさん……。源之丞おじさんがいなくなってしまうの……。」と電話の向うでゆづ

子が泣きだした。

「なんだって？ ゆづ子……。おしおし、ゆづ子……。とっつしたんだ？」

「源之丞おじさんがいないの……。」

家のドアが開き、中からゆづ子の母、千絵が出てきた。ゆづ子とよく似た美しい顔、長い
髪。まだ２歳か３歳に見える。「ただいま」とゆづ子は元気に言った。

「今日は本当にありがとうございます。おかげさまで仕事も全部、終わりました。私も

一緒に来たかった。」と千絵は竜彦に言った。そして、ゆづ子を見て言った。「ゆづ子、楽

しかった？ おじさんと一緒によかったね。」

竜彦は千絵に挨拶をして、車に乗った。ゆづ子が「さようなら。おじがとっ。」と言いな

から手を振った。

(2)

夜、千絵が病気になるって病院へ行った。千絵はじつなるのだから？
小さいゆづ子はひとりで大丈夫だろうか？

助けてくれる人はいるだろうか？

二日後の午前二時、竜彦のアパートの電話が鳴っている。竜彦は、ベッドで寝ている。電話は鳴り続けている。竜彦は目をさました。「もしもし」電話の向こうで、ゆう子が大きい声で言った。「おじさん！お母さんが病気の。助けて。」

「お母さんが病気？それなら、お祖母ちゃんがおばさんに電話をしなよ。今、午前二時だよ。」と竜彦は怒って言った。

「お祖母ちゃんは遠くにいるの。九州にいるの。」

「じゃ、おばさんに電話しなよ。」

「おばさんはいないの。おじさん、助けて。お母さんが死にそうなの。」電話の向こうのゆう子が泣いている。

「早く家へ帰って寝たほうがいい。」

「部長、今日はクリスマス・イヴですよ。家に帰って寝る？そんなことはできません。ゆかりさんといっしょにホテルで食事、ね？野崎さん。」

とそばの女の人が竜彦を見て笑いながら言った。

「早く、結婚しろよ。」とおじの男の人が言った。みんな、竜彦の顔を見て笑った。

その時、電話が鳴った。

「はい、え？野崎？はい、います。少しお待ちください。野崎さん、電話。」

「はい、野崎です。」

「おじさん。」

「ゆう子？ゆう子……元気がどうしている？そちらのクリスマスはどう？今、何時だ？」

「おじさん、ゆう子がいなくなっちゃったんだよ。」

「い？」
二人は、楽しそうに話しながら、白い道を歩き続ける。

(11)

クリスマス・イブにゆう子から電話があった。ゆう子はミミにいらのだから。

竜彦とゆかりのクリスマス・イブはじになるのだから。

源之丞とキヤサリイはじのしたのだから。

部屋のアが開いて、竜彦が入ってきた。とても疲れた顔をしている。

「ああ、終わった終わった。今年の仕事は全部終わった。」竜彦が言くと、「苦労さん。」野崎

君、目が真つ赤だよ。」と部長が大きい声で言った。

「はい、三日間、寝ないで仕事をしましたから。」

竜彦は（仕方ないなあ）と言いながら、ベッドから出た。「じゃ、救急車を呼ぶ。119だ。
いいか？すぐ行くから。」

竜彦はゆう子の家に着いた。救急車が家の前に止まっていて、ゆう子が車のそばに
いた。ゆう子は黒いかばんを大切そうに持っている。「おじさん。来てくれてありがとうございます。」

「そのかばんは何？」

「これ？お母さんがいつも言っていたの。大切なものが入っているから、何かあったら持つ
ていきなさいって。」

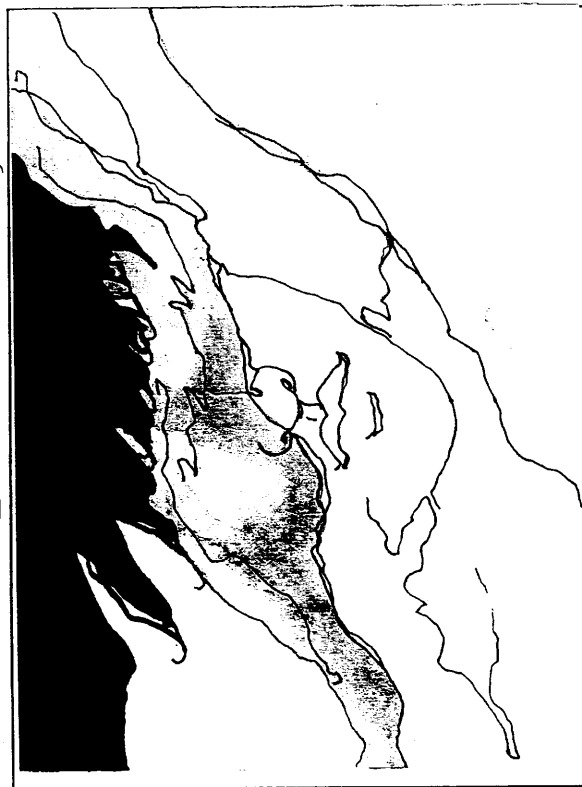
「（親戚の方ですか？）と救急車の人が竜彦にきいた。

「いえ。この家の近くに住んでいます。」

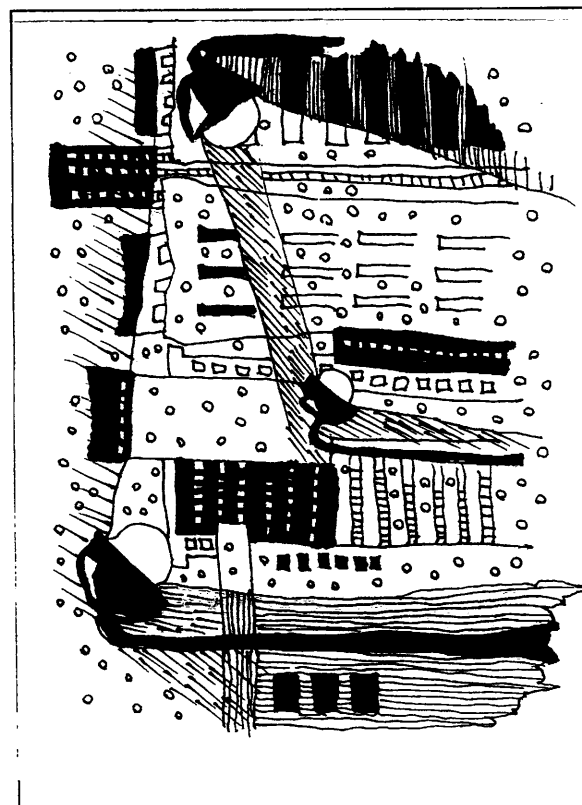
「あ、そうですか。病気の人は救急車の中です。急いでください。この子供といっし

よに救急車^{きゅうきゅうしゃ}に乗^のって下さい。いっしょに病院^{びょういん}へ行って下さい。」

救急車^{きゅうきゅうしゃ}が病院^{びょういん}に着^ついた。病院^{びょういん}から
3, 4人^{にん}の看護婦^{かんごふ}が^で出てきて、千絵^{ちえ}を手術室^{しゅじゅつしつ}
へ運^{はこ}んだ。竜彦^{たつひこ}とゆう子^こも手術室^{しゅじゅつしつ}へ行き、
部屋^{へや}のまえの椅子^{いす}に座^{すわ}った。一人^{ひとり}は心配^{しんぱい}そうに
手術室^{しゅじゅつしつ}のドア^みを見^みている。竜彦^{たつひこ}はゆう子^こに
小^{ちい}さい声^{こえ}で^きいた。「お母^{かあ}さんはどうしたの？」
「頭^{あたま}が^{いた}痛い、^{いた}痛い^いと言^いったの。それで、お
じさんに電話^{でんわ}したの。」



「ゆかりさん、スキーは好き^すき。」
「ええ、だい^{だい}好き^すき。」
「冬^{ふゆ}の休^{やす}みに、どこか^いくスキーに行^いくか？」
「ほんとう^いうれしー」
「どこ^いがいいかな？」
「考^{かん}えましよう、いっしょに。クリスマスに
クリスマスは時^じ間^{かん}がある？」
「ああ、いま^{いま}はと^いても忙^{いそ}しいけれど、クリ
マスは大^{だい}丈^{じょう}夫^ふだと思^{おも}う。」
「そう、よかつた。じゃ、ホテ^ほルのレ^れス^すトラ^らン
で食^{しょく}事^じをする？ 予^よ約^{やく}しておく。
12月^{がつ}24日^か、クリスマス・イブ^{いぶ}ね。何^{なん}時^じが



の源之丞、病氣になつたり、事故にあつたり、死んでしまつたり……。あの家族にはいる
いふなことがあつる。どうしてだつて。
いやいや、ゆう子とはさうなをしたらんだ。ゆう子のことではあつたれよう。
はくもむつるゝ歳。普通の幸せな家族を持つ（こと）を考えた。（うづ）

(10)

竜彦は、普通の幸せをみつけることができたつてか？

北海道に、初雪が降つた。これから寒くなる。
街の木々も道も真つ白だ。白い道を、竜彦とゆかりが手をつないで歩いている。
ゆかりは背が高く、髪が長くてきれいな女の人だ。青いコートを着て、黒くて長い靴を
はいている。

「親戚の人に來てもらわなければならない。近くにいる人はだれ？」
「おばあちゃん。」

「おばあちゃんは九州だつて。」

「そう、九州よ。」

「ほかにいないのか？」

「お母さんの弟がいる。」

「じゃ、その人に電話しなければ、どこにいるの？」

「アメリカ。」

「えっ？アメリカ？アメリカのどこ？」

「オレゴン。」

「じゃ、すぐ來られないじゃないか。お父さんの親戚は？」

「お父さんの親戚？知らない。」

「じゃ、しかながない。おばあちゃんに電話しよう。電話番号がわかるか？」

竜彦は携帯電話をポケットから出して、ゆう子のかばんの中を探して小さいノートを見つけた。

「あつた。おばあちゃんの電話番号。」

竜彦はボタンを押して、ゆう子に携帯電話を渡した。

「もしもし、おばあちゃん。私、北海道のゆう子です。おばあちゃん、寝ていたらごめんなさい。あのね、お母さんが今、入院したの。ちよつとおじさんに代わります。」

「あ、初めまして。野崎と申します。私はゆう子ちゃんの家の近くに住んでいますが、千絵さんが救急車で運ばれて、入院されたんです。はい、はい、そうです。それで、すぐに手術をしなければならないそうです。できるだけ早く北海道に来ていただけませんか？ゆう子ちゃんが一人で大変ですから。」

電話の向こうの人が言った。「お世話になります。でも、私も今ちよつと大変で、北海道

14

「みなさん、長い間、休みました。すみませんでした。」竜彦は頭を下げた。

夜、竜彦は会社の人たちといっしょにビールを飲んでいる。部長が来て、竜彦の前に座った。竜彦は部長のグラスにビールを入れた。

「おい、野崎君。」と部長はビールを一口飲んでから言った。「いい人があるんだ。結婚しないか？」

「結婚？結婚ですか……。結婚、家族……。いいですね。普通の幸せな家族がいいですね。家族がいないのは淋しいですから。」

「あ、野崎君、そう？結婚したい？それはいい。いい人があるんだ。紹介しよう。」

(結婚か……。) 竜彦は心の中で思った。(ゆう子はどうしているだろう。アメリカで楽しく生活しているだろうか？ゆう子の母の千絵、祖母の登美子、祖父の将之介、千絵の弟

59

「長い話？長い話は暇な時に聞くよ。で、これは何だ？」と部長は辞表と書いてある白い封筒を手にとって、竜彦に言った。「2ヶ月も会社を休んで、久しぶりに会社へ来た。会社へ来たのは、この辞表を出すためか？この会社はとても忙しいんだ。それを知っているのに、辞表を出すのか？」

「でも部長、私が電話で『休ませてください』と言ったら、会社をやめて、辞表を出せとおっしゃったじゃないですか。」

「ああ、あの時は……。いいから、早く仕事をしろ。仕事は山のようにあるんだ。」と言つて部長は竜彦の「辞表」と書いた封筒を破つて捨てた。

竜彦は自分の机に行くけど、部長が今までよりもっと大きい声で言った。

「野崎君が会社へ帰ってきた。今晚は、みんなで飲もう。」

部屋の中から「オー」という声があった。みんな、嬉しそうだ。

「いけないんです。もう少し、一人のことをお願いできないでしょうか？」

電話を切つて、竜彦は入院のための書類を書き始めた。書類を隣から見ていたゆう子がいいた。「おじさんの名前は竜彦？」

「そうだよ。いい名前だろう？でも、本当に親戚の人はいないの？」

「うん、いない。だから、お母さんにはおじさんがとても大切だったの。おじさんが『お母さんと結婚しない』と言つたでしょう。お母さんは『悲しい、悲しい』と言つて毎晩、泣きながらお酒を飲んでたの。ね、おじさん、お母さんの手術が終わるまでここにいて、にいて。」

竜彦がやさしくなると、ゆう子は安心して目を閉じた。

(3)

竜彦とゆう子と千絵は、いつ、どこで知り合ったのだろう？

安心して寝ているゆう子の隣で、竜彦は思い出していた。

——3ヶ月前の日曜日だった。

千絵がカートを押しながらスーパーの中を歩いている。美しい千絵の隣には、かわいいゆう子がいる。二人は楽しそうに話しながら食べ物を選んでカートに入れている。

二人はレジでお金を払い、品物を袋に入れ始めた。

「あらあら、こんなにたくさん買ってしまった。重くて持って帰れないわ。困ったわね。どうしよう？」と千絵が言った。

「大丈夫。私が見つから。うわっ、重い。」二人は幸せそうに大きい声で笑った。

竜彦は、ゆう子の隣で牛乳や卵を袋に入れていたが、楽しそうな二人の話を聞いていつしよに笑ってしまった。

「おう、野崎君」と部長が大きい声で言うと、部屋みんなが竜彦を見た。

部長は40歳くらいのおお、おと、ひと、で、声も大きい。

「長い間、休みました。申し訳ありませんでした。」と竜彦は部長の前に行き、ポケットから白い封筒を出した。封筒の上には「辞表」と書いてある。

「なんだ？辞表？この会社をやめるのか？新しい仕事をみつけたのか？」と部長が言った。

「いいえ、これから探します。昨日、北海道へ帰ってきました。」

「どこから？」

「オレゴンからです」

「オレゴン？」

「はい、アメリカです。」

「アメリカ……。何をしていたんだ？」

「いろいろ大変なことがありましたので。とても長い話です。」

(9)

竜彦は北海道へ帰った。

新しい仕事が見つかるだろうか？

飛行機が北海道の空港に着いて、中からかばんを持った人が降りた。

(ああ、終わった、終わった。ぜんぶ終わった。明日から、仕事を探そう。)

竜彦は青くてきれいな北海道の空を見上げた。

広い部屋にたくさん机があり、机の上にはコンピュータが並んでいる。

コンピュータの前で仕事をしている人も、電話で話している人もいる。話し合っている

人たちがいる。男の人も女の人も若い。

ドアが開いて、竜彦が部屋に入ってきた。

かわいいゆう子か竜彦の顔を見てまた笑った。

「ぼくの車に乗ったらいいよ。家まで送ってあげよう。」

「うわっ、嬉しい。お母さん、よかったね。」

あの日から、週末はいつも三人でドライブした。いつも三人だった。――

(三人だったから、千絵さんと二人だけで話したことはなかったなあ。)と

ゆう子の寝顔を見ながら竜彦は思った。

(4)

千絵のお母さん・ゆう子のおばあさんは病院へ来ることができなくなっか？

千絵の家族はどんな人たちだろうか？

手術室のドアが開いた。

「先生、手術は……」竜彦は立ち上がってきた。ゆう子はよく寝ている。「終わりました。手術はうまくいきました。が、まだ安心できません。血がたくさん出たんです。私のできることは全部しました。あとは、病人が頑張るだけです。」
「どうもありがとうございます。」

竜彦は頭を下げた。

手術室のドアが大きく開いて、千絵を乗せたベッドが3、4人の看護婦に押されて出てきた。ゆう子も目をさまし、竜彦といっしょに千絵を見た。千絵は白い包帯で頭を巻かれ、目を閉じている。「お母さん」とゆう子は心配そうに、包帯で頭を巻かれた千絵に呼びかけた。

「大丈夫よ。お母さんはよく頑張ったね。今、薬で寝ているの。もう少し待ってね。お

リンが「ゆう子は学校へ行かなければなりません。休みに連れて行ってあげます。」と言った。

「はい。」とゆう子は答えた。

「ほくは、明日、日本へ帰ります。仕事がありますから。」と竜彦が言った。

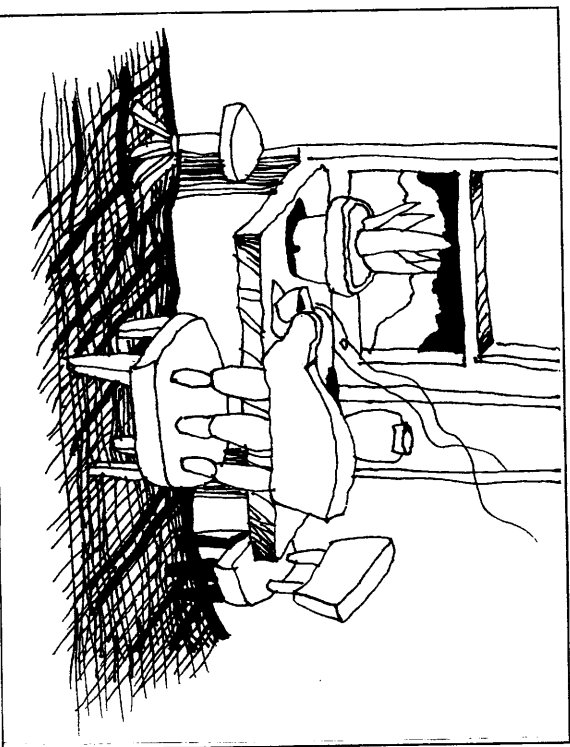
「おじさん、会社をやめさせられたのでしょうか。私を九州へ連れて行ったり、アメリカまで連れて来なければならなかったから。」

「えっ？そうでしたか。それは、本当に申し訳ありません。」と源之丞は頭を下げた。

「いえ、いいんです。私の仕事はコンピューターです。コンピューターの仕事は、簡単に探すことができます。」と言って、竜彦はおいしそうにサンドイッチを食べた。

「食べてから取りに行くよ。おじさんね、この家に泊まるのじゃない。」

「泊まってくたさい。いつまでも泊まってくたさい。速い日本からいっしょにやっただけから。」と源之丞が言った。「ぜひ泊まってくたさい。オレコにね、いっしょがたくさんあります。源之丞の車を使ってくたさい。そしてどこでも好きなところへ行ってくたさい。そっだ、源之丞もいっしょに行きたい。」とおいしそうなコートを大きいカバンに入れながら、キヤサリが言った。
「私も行きたい。」とゆう子が言った。キヤサ



母さん、もうすぐ目を覚めますから。」と看護婦が言った。それから、竜彦を見て、「病人をこれから病室へ運びます。2、3日はだれがこの病人のそばにいてください。」と言った。

「はい、だれか親戚の者が来ると思いますが、もう一度電話を試してみます。」

千絵が病室に入ったのを見て、竜彦はポケットから携帯電話を出した。ゆう子に電話番号を教えてもらい、竜彦はボタンを押した。

「もしもし、北海道の野崎ですが、おはようございます。今、手術が終わりました。手術はうまくいったそうです。でも、血がたぐさん出たそうです。それで、まだ安心できないそうです。それで、2、3日は親戚の人にそばにいてほしいそうです。」竜彦が言うと、電話の向こうでゆう子の祖母が言った。

「本当に、本当に有難うございます。すぐに北海道に行きたいのですが、私の夫が、

あ、千絵の父ですが、病気で私が世話をしなければならないのです。毎日の世話が大変な



んです。私も体が弱くて……。それで、千絵に九州に帰ってきてほしいと思つていたのです。」

「はあ……それは大変ですね。千絵さんの兄弟は？ 弟さんがいらつしやるのでしょ

う？」

「それが、アメリカにしまして、帰ってくるのはちよつと……。」

「遠くて大変でしょうけれど、千絵さんが死ぬかもしれないですよ。お帰りになれないで

しょうか？ 電話をなぞいましたか？」

いて、本当によかつたと思います。これからは、お父さんとお母さんがいる普通の子供の生活ができますから。」

「一人が話していると、ゆう子がきた。」

「おじさんたち、こはんですよ。」

ゆう子は、源之丞の車椅子を押して食事の部屋へ行つた。

竜彦もゆう子の後から食事の部屋に入つた。

テーブルの上には、パン、チーズ、ハム、サラダなどいろいろなものが置いてある。

「好きなものをとって、サンドイッチにして食べるのよ。」とゆう子が出た。

「おいしそうだな。あ、そうそう、ゆう子のかばんはまだ車の中だ。取りに行かなければな

らない。」と竜彦が出た。

キヤサリふさんも働いそうな人ですね」

「ええ、キヤサリへはとて働しい人です。ゆう子を可愛がつてくれると思います。」
「ゆう子ちゃんね、今度は幸せになれるですね。お母さんもおねはあさんね、亡くなつてしまひました。お父さん亡くなつたと聞いています。」

「ゆう子には、お父さんはいないのです。」

「ええ。」

「姉は結婚しませんでした。結婚しないで、ゆう子を産んだのです。」

「そうですね。千絵さんのような人を捨てるなんて、ばか男だ。」

「いや、姉が相手の人を捨てたのです。姉は、結婚するつもりはなかったのです。でも、子供はほしいと言つていました。」

「そうですね。でも、子供にはお父さん必要ではないでしょうか。千絵さんに、弟が

「はい、すぐに電話をしたのですが、息子は、千絵の弟ですが、二日前に事故にあつて入院しているらしいのです。手術をしたばかりだそうで、息子は帰ることができません。息子の妻がアメリカ人で、日本語がよくわからないんです。ですから、アメリカ人の妻が北海道に行つても、なにもできないでしょう……。本当にすみません。」

「それは大変ですね。でも、私も困ります。ほかに親戚の方はいらつしやいませんか？」
「ええ、いません。私は兄、弟がいません。千絵の父には、弟が二人いますが、一人は家族みんながオーストラリアに住んでいます。もう一人はもうなくなりました。」

「はあ……。じゃ、ゆう子ちゃんのお父さんはどうでしょうか？ ぼくはよく知らないのですが、もうなくなつたのでしょうか？ 千絵さんは離婚したと聞いていますか。」

電話の向うが静かになった。竜彦の質問に答えたくないようだった。

電話の向うから声が聞えた。「ゆう子の父親はなくなりました。ゆう子が生まれてすぐになくなったのです。名前を一郎さんといいましたが、この一郎さんの家族は一郎さんが千絵と結婚することに反対でした。私は、一郎さんの家族がどういう方たちなのか、ぜんぜん知らないのです。」

「だけど、ゆう子ちゃんは一郎さんの子供ですから、一郎さんの家族がゆう子ちゃんの世話をしてもいいでしょう。普通の時ではないんですから。」

「はあ……。本当にすみません。一郎さんの家族が今どこにいるのかも知らないのです。千絵は知っているかもしれませんが、本当にすみません。今お願いできるのは、あなただけなのです。」

「それは、まあ、できることはしますが、ぼくは男ですし、結婚もしていませんから、女性の子絵さんや子供のゆう子ちゃんの世話はできないんです。」

「はしめまして。野崎です。ゆう子ちゃんを連れてきました」

「萱島源之丞です。たいくんお世話になりました。本当に有難うございました。」

一人は挨拶をした。千絵の弟の源之丞は、へんさんだ。

「足はいかがですか？」

「おかげさまでだいぶよくなりました。でも、まだ歩けません。車椅子に乗っています。」

「大変ですね。大変なのに、ゆう子ちゃんを連れてきてしまいました。」

「はい、ゆう子は私たちが育てます。キヤサリは、仕事をしながら私の世話をし、これからはゆう子の世話もしなければなりません。でも、ゆう子はひとりで何でもできると言っています。私たちのことは心配ありません。」

「ええ、ゆう子ちゃんは、元気ないい子供です。新しい生活も心配ないと思います。」

でも、アメリカではこのような家は普通です。」とキヤサリが言った。

「どんなお仕事をなさっているんですか。」と竜彦がきいた。

「テレビの仕事です。」

「キヤスター？」

「いえ、キヤメラマンです。」

「ああ、そうですね。主人は？」

「主人はアメリカにある日本の会社で働いています。今は、会社を作っていてひとりで

仕事をしています。」

大きい声が階段から聞えた。「おおい。ゆう子。元気で着いたか？」

「あ、おじさん。源之丞おじさんー。」ゆう子は走って階段を上がった。

竜彦も階段を上がって2階へ行った。

「すみません。どうぞよろしくお願ひします。ぜひ、野崎さんにお任せします。」

「いやあ、それは困るのです。責任はとれません。」

「けっ、んです。責任をとらなくてわけっ、んです。どんなって、何も言ひません。お任せ

したんですから。」

「ぼくのことを何も知らないのに、大切な千絵さんをぼくに任せるのですか？」「いえ、野崎

さんのことは千絵から聞いています。ですから、私は野崎さんを信じているのです。私、た

ちのお願ひは手紙に書きますから、住所を教えていただけませんか？それからお電話

番号も。」

竜彦は、しかたがないと思ひながら、住所と電話番号を教えた。

「有難うございます。では、よろしくお願ひします。」

「あー、千絵さんはぼくのことをお母さんに話していただけますか？ぼくが千絵さんに初めて

あ 会ったのは3ヶ月前なんです。」

「ええ、ええ。聞いています。野崎さんはいい方で、
できたら結婚したいと千絵は言っていました。でも、
子供がいるからむずかしいだろうと言っていました。
ゆう子がいいますから。」

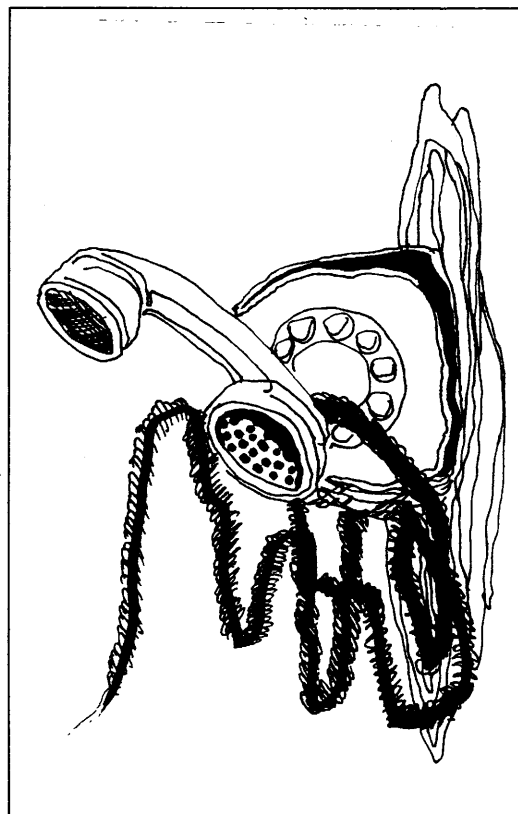
「そうでしたか・・・。」

「あの、すみませんが、ゆう子に代わっていただけます
か？ちよつと話したいことがあります。」

「あ、はい、いま、代ります。」

竜彦は電話をゆう子に渡した。

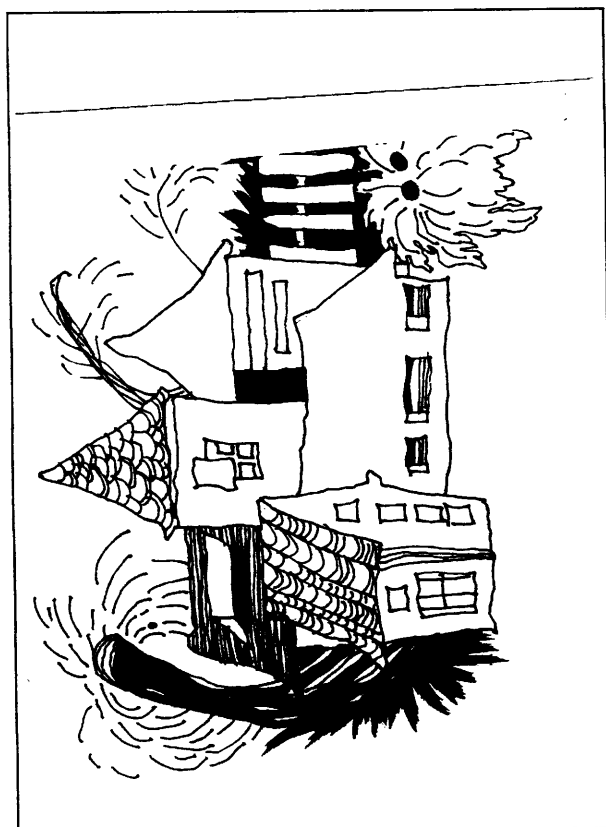
「もしもし、おはあちゃん、ゆう子です。はい、はい、



30分くらい走って、車は白い家の前で
止まった。家の前には広くてきれいな庭が
ある。庭にはプールもある。遠くには白い
山々が見える。白いのは雪だ。

「すばらしい！いいところだなあ！大きい
家と広い庭。」と竜彦はあちろちろを
見ながら言った。

「日本は家が高いそうですね。日本では
お金がなかったら、このような大きい家には
住めない、と源之丞が言っていました。」



竜彦は、ゆう子の大きいかばんを車に乗せてから、車に乗った。「ゆう子、ゆう子は前に乗せてもらいなさい。ほくは、この広い後ろの席にひとりで座ろう。」

「あ、アメリカでは、子供は前の席に座ってはいけないのです、ミスター・ノザギ。」

「あ、そうですか。キヤサリン、ほくをタシと呼んでください。」

「タシ？ はい、わかりました。では行きましょう。」

大きくて青いリンカーンが走りだした。

木が多くて静かな街の中には、車が少ない。人もあまりいない。街を通り、それから

川のそばを走って、橋を渡った。

「きれいねえ。きれいねえ。」とゆう子が窓の外を見ながら言う。

「うん、静かでいいところだね。」と竜彦も窓の外を見ている。

わかった。おばあちゃんも元気でね。」ゆう子は電話を竜彦に返した。竜彦は電話を切つてポケットに入れたから言った。「ゆう子ちゃん、家族はみんな家族なんだ。どうして、みんないっしょに病気になるのだから。ゆう子ちゃんのおしちやんが病氣、おじさんは事故で入院、お母さんも病院。どうしたらいいんだ。困ったなあ。ゆう子ちゃん、そのかばんの中にお父さんの親戚の住所や電話番号が入っていない？それからお母さんの会社の電話番号。ゆう子ちゃん、今日は学校、どうする？休む？いや、学校に電話をしなければいけない。ほくも会社じょうしよかな。仕事、忙しいんだよ、困ったな。」

(5)

千絵は目をさますだろうか？

千絵の会社の人は助けに来てくれるだろうか？

竜彦とゆう子は千絵の病室にいる。ゆう子はかばんから中のものをひとつひとつ出して見ている。財布、銀行の通帳、カード、印鑑、鍵などが椅子に並んでいる。

「おじさん、お母さんの会社の電話番号があった。」手帳をかばんから出し、会社の電話番号を見つけて、ゆう子と言った。

「この会社か？何をやる会社？」

「フアッションショーとかパーティーとかをやる会社よ。おじさんは？」

「ぼくはコンピュータの会社。」

「ゲームを作るの？」

「うん、ゲームも作るよ。」

手帳を持っているゆう子に竜彦は言った。

い声で言った。「キヤサリ、おはさんですか。」

「へー、ゆう子。」と女性が大きい声で答えた。

「アイ、アム、タシとコ、ノザキ。エウ、ドラ、エウ、ドラ」と竜彦は言った。

「はじめまして。キヤサリ、テラー、カサシヤです。」とキヤサリはきれいな日本語でゆづり言った。

三人はキヤサリの車のほうへ歩いた。

大きくて青い車の前でキヤサリが「どあ、らっぞ」と言いながらドアを開けた。

「すごい車ね。おはさん。この車はリカー？」ゆう子は嬉しそうに車に乗った。

「エウコ、わたしはキヤサリ。キヤサリと呼んでください。」

「はい」とゆう子は広い車の中を見ながら言った。

ゆう子はどこへ行くのだらうか。

ゆう子は 幸せになれるだろうか。

飛行機がアメリカ、オレゴンのポートランド空港に着いた。竜彦とゆう子が飛行機を降りた。

「おじさん、アメリカに来てしまったね。」

「うん、ゆう子を送りにアメリカまで来てしまった。」

「よかつたじゃない。九州にも行けたし、今度はアメリカまで来られて。」

「よかつた。会社をやめさせられたんだよ。ま、これが最後だ。これでゆう子とわたしはな

い、だからね。ゆう子、いい子にして、おじさんとおばさんに可愛がってもらいたいよ。」

「うん。あ、あの人、ギヤサリおばさんよ。写真で見たいことがある。」

「シヤッにジーンズの背の高い女性がゆう子に手を振りながら、こちらへ来る。ゆう子が大き

「ない。」

「ない。じゃ、その手帳を見せて。ほくが探そう。お父さんの名前は？」

「知らない。」

「知らない。じゃ、探せないな。では、お母さんの会社に電話をしよう。」と言って竜彦は

携帯電話をポケットから出し、ボタンを押した。それから、竜彦はあちこちに電話をし

た。

「ゆう子ちゃん、お母さんの会社の人はいずれも来られないそうだ。それから、ゆう子ちゃん

の学校の先生に電話をしておいた。今日は休み、と言っておいだから大丈夫だ。」

「おじさんの会社は？」

「ああ、電話をしたよ。」

「大丈夫？」

「うん……。結婚していないのに、どうしてそんなに親切にするのかって言われたよ。」

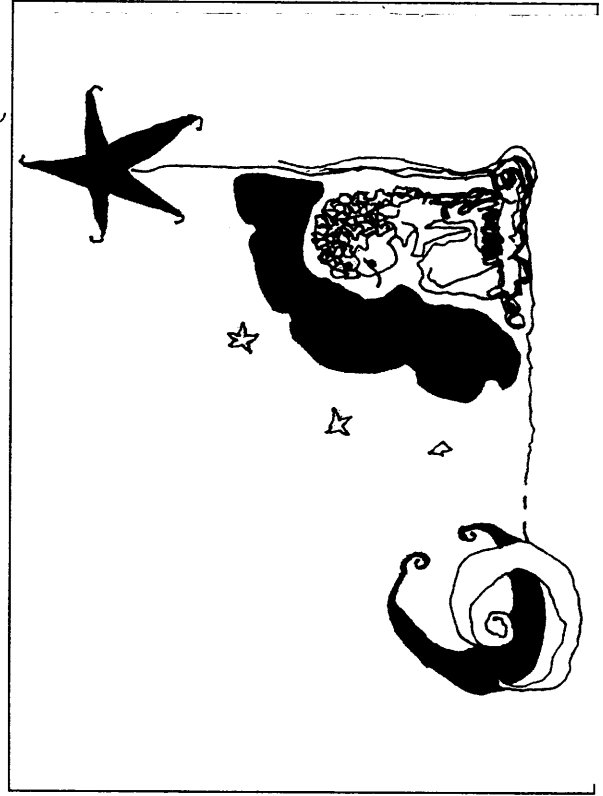
「そう……。ねえ、おじさん。きのうお母さんと結婚したと思っただろう？ そうしたら、おじさんがお母さんや私のために会社を休んでも変じやないでしょう。」

「うむ、そうだね。そうしようか。よし、じゃ

、そうしよう。ゆう子、まず、朝飯だ。

朝飯を食べに行こう。」

「おじさん、どうしてゆう子に言うの？ 今



からないみたいだね。」

「そう。前のことは忘れない。でも、新しいことは覚えられないみたい。」

「ゆう子を千絵さんだと思っている。」

「うん。」

「ゆう子のお父さんのことはよくわからないみたいだね。」

「おじいちゃんはお父さんにもあまり会ったことがなかったから。おじさんを私のお父さんだと思っている。おじさん、いいじゃない？ おじさんはお母さんと結婚したかったのだから。」

「そうだねえ……。いぬね。お父さんになれなくて。オレゴは寒いよ。北海道と同じくらい寒いよ。」

「うん。九州に住めたらよかった……。九州のほうが暖かいから。」

る？」

「アメリカにいるのよ。」

「アメリカ？ほお、アメリカか。そうか。アメリカにいるのか。で、千絵、千絵は北海道に帰るのか？」と将之介は言っ、千絵を見た。

「あなた、すみませんが、千絵をお願いします。」

「はあ……。」

「おじいちゃん、一人になってしまっね。『めんなさい。私、大きくなったらおじいちゃん

の世話をするから、それまで待つていてね。」

「あ、私は大丈夫だ。登妻子が来てくれるから。」

竜彦とゆう子は、病院を出た。バスを待ちながら竜彦が言った。

「おじいちゃん、おばあちゃんもお母さんも源之丞おじさんわかるのに、今のことがわ

までゆう子ちゃんって言うていたのに。」

「お母さんとおじいさんは昨日結婚したんだ。だから、ゆう子はほくの子供だ。ゆう子、お母さん、朝一飯だ。『はんを食へに行こ。』」

二人は病室を出た。

朝一飯を食って、二人はまた病室へ行った。

千絵は寝たまままだ。目をささない千絵をを心配そうに見て、ゆう子が言った。

「おじいさん、お母さんはいつ目がさめるの？」

「手術が終わってから時間……。はやく目がさめるといいね。」

その時、だれかが病室のドアを静かにノックした。竜彦はドアを開けると、背の高い、優しい、そんな女の人が、大きなかばんを持って立っていた。竜彦は女の子を見て、「やあ。

来てくれてありがとう。」と言った。

竜彦は女の人を病室の外の椅子に連れて行き、昨日の夜から今までのことを話した。

「頼みます。来てくれて本当に助かるよ。」と言いながら、竜彦は立ち上がりは女の人を病室へ入れた。病室では、ゆう子が疲れた顔で千絵を見ている。千絵はまだ寝ている。

「ゆう子ちゃん。こちら、ぼくのお母さんだ。野崎保子。ぼくたちを助けるために東京から来てくれた。」

「まあ、かわいいわね。ゆう子ちゃん、こんにちは。」

「ゆう子ちゃん、これから家に帰って休みなさい。このおばさんをいじめちゃだめだよ。」

「いじめる？ いじめたりしないわね。ゆう子ちゃん。」

「ぼくはゆう子ちゃんにいじめられているんだ。」と言いながら、竜彦は財布からお金を出し

子はバスに乗って、将之介のいる病院へ行った。

「おじいちゃん、さようならを言いに来たの。」

「ああ、千絵、北海道に帰るのか？ 私、家にも帰りたい。登美子はどこにいる？ 私、家にも帰るよ。登美子、登美子、いっしょに帰ろう。登美子はどこにいる。」

「おじいちゃん。」とゆう子は静かに言った。

「わたしはゆう子。わたし、アメリカへ行くの。」

「えっ？ アメリカ？ どうしてアメリカへ行くの？ 勉強しに行くのか？ こんなに小さいのに、アメリカへ勉強しに行くのか・・・。」

「おじいちゃん、わたし、源之丞おじさんの家へ行くの。」

「源之丞おじさん？ 源之丞おじさん？ 源之丞・・・。ああ、源之丞。源之丞はどこにい

葬式が終わる、家の中は静かになった。

「疲れたね、お茶でも飲みましょう。」と登美子はゆう子に言っ、立ち上がった。が、「あ

と言っで倒れてしまった。

「おはあちゃんー」ゆう子が驚いて登美子を見た。

次の日、登美子の家の大きな部屋にたくさんの人がいる。ゆう子も童彦といっしょにいる。

ゆう子の隣に将之介が座っている。登美子の葬式が始まった。

みんな、黒い服を着ている。小さいゆう子を見て泣く人もいる。

葬式が終わった次の次の日、家の中はとも静かだ。家に登美子はもういない。将之介

もいない。

「そあ、おじいちゃんにさようならを言いにいく。」と童彦がゆう子に言った。童彦とゆう

だ。「母さん、これ。」

「大丈夫よ、私も少しお金を持っているから。」と保子が言った。

「いや、必要なお金は今ほくが出す。けれど、後でこの千絵さんから返してもらおう。だ

から、このお金をタクシーや食事に使ってほしい。」

「じゃ、もらっていくわ。」

ゆう子と保子がゆう子の家に帰り、童彦は一人、千絵の病室に残った。

千絵が苦しそうな声を出した。童彦は驚いて千絵を見た。とても苦しそうな顔だ。童彦

は急いで、看護婦を呼んだ。看護婦は千絵を見て、大急ぎで医者を呼びに行った。童彦は

心配になった。医者と看護婦が病室に来た。童彦は静かに病室を出た。

看護婦と医者が出てきて、童彦に言った。

「まだ、血がたくさん出ました。とても心配です。」

「大丈夫でしょうか。」

「大丈夫？ わかりません。心配です。家族や親戚の方を呼んでください。」

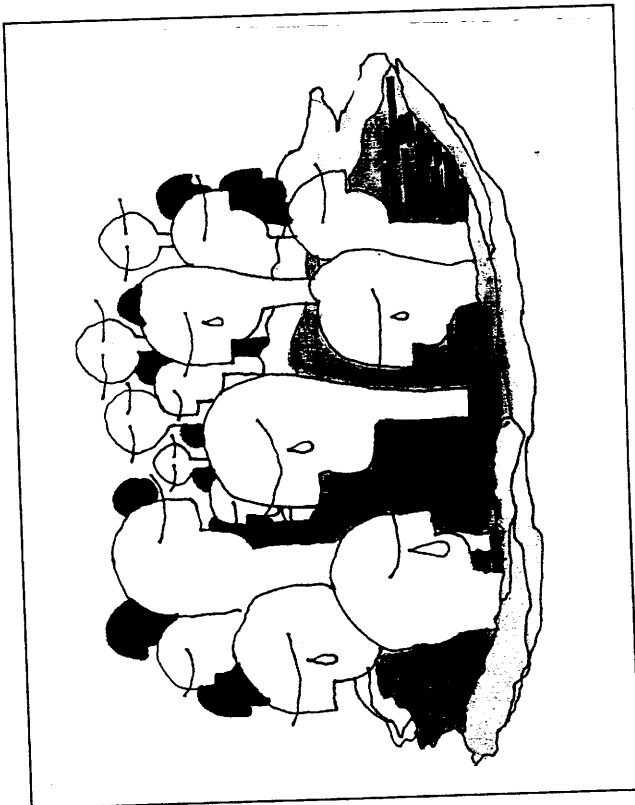
竜彦は千絵の病室に入った。千絵の顔は青くて、死んでいるようだった。

(6)

千絵は元気になるだろうか？

竜彦は会社へ、ゆう子は学校へ行けるだろうか？

小さくて白い箱をもってゆう子が車に乗っている。運転しているのは竜彦。二人は黒い服を着ている。「お母さんは骨になってこの箱に入っている。お母さん、こんなに小さくなってしまった・・・。」



みんな、黒い服を着ている。将之介が大きい声で登美子に言った。「おい、登美子、千絵はどこだ？ たくさんの人が来ているのに、どうして千絵はいないの？ 千絵を呼びなさい。おい、千絵、みなさんに挨拶をしなさい。」登美子は困った顔をして、竜彦を見る。みんなも困った顔をしている。

「おいちゃん、お母さんはあそこ。あそこにいるの。」とゆう子が白くて小さい箱を指さす。

をトイレへ連れて行った。

ゆう子^こは台所^{だいどころ}へ行き、掃除^{そうじ}を始めた。そして、冷蔵庫^{れいぞうこ}から氷^{こおり}を出して、登美子^{とみこ}の足の上^{あしの上}においた。

「千絵^{ちえ}はやさしいなあ。やさしいいい子^こだ。」と将之介^{まさのすけ}はゆう子^こを嬉^{うれ}しそうに見た。

童彦^{たつひこ}は、3人^{ひと}を驚^{おどろ}いて見ている。

(7)

ゆう子^こは九州^{きゅうしゅう}にいることができるだろうか？

登美子^{とみこ}は元氣^{げんき}でゆう子^この世話^{せわ}をするにができるだろうか？

次の日^{つぎひ}、登美子^{とみこ}の家の大^{おお}きい部屋^{へや}にたくさんの人^{ひと}がいる。ゆう子^こも童彦^{たつひこ}といっしょにいる。

登美子^{とみこ}の隣^{となり}に将之介^{まさのすけ}が座^{すわ}っている。千絵^{ちえ}の葬式^{そうしき}が始^{はじ}まった。

「んん・・・。」童彦^{たつひこ}は何^{なん}と言^いったらいのかわから

ない。

「私^{わたし}、一人^{ひとり}になってしまった・・・。」

童彦^{たつひこ}はゆう子^この肩^{かた}を抱^だいた。

「私^{わたし}、どうなるの？」

「これから飛行機^{ひこうき}に乗^のって九州^{きゅうしゅう}のおばあちゃん

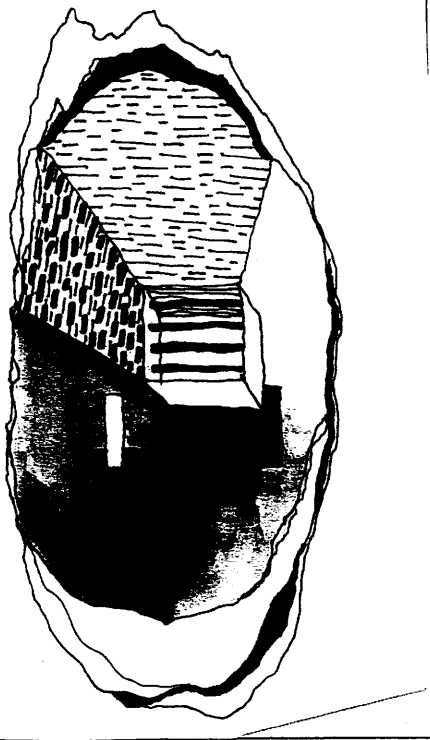
の家^{いえ}に行く。おばあちゃんかゆう子^このためになにか

考^{かんが}えてくれるよ。」

「でも、おじいちゃん^{おじいちゃん}は病氣^{びょうき}でしょう。おじい

ちゃん^{ちゃん}の病氣^{びょうき}、悪^{わる}いんだって。おばあちゃん^{おばあちゃん}は

若^{わか}くないし、私^{わたし}が行^いったら、おばあちゃん^{おばあちゃん}は



大^{だい}変^{へん}になるよ。」

「じゃ、アメリカへ行く？アメリカのオレゴンへ行く？」

「おじさんは事故にあつて今、病院にいる。」

「すぐ元気になるよ。」

「わからない。元気にならないかもしれない。おばさんはアメリカ人だし、私は英語がわからないし……。」

「うん。でも ゆう子は若いから、英語をすぐ覚ええられるよ。」

「わか
若すぎるわ。」

ゆう子は悲しそうに竜彦を見た。竜彦はゆう子を強く抱いた。

九州の空港に飛行機が着いた。飛行機から白くて小さい箱を大事そうに持ったゆう子

「子供には親が必要です。一郎さん、あなたの両親との問題はあります。けれど」

子供には親が必要です。連れて行ってください。」

竜彦は困った顔をしている。

登美子が言った。「そうねえ。でも、ゆう子はこんなに小さいから、私が世話をしますよ。小さい子供には女の人が必要ですから。」

登美子は「うん、そうだな。」と言って立った。

登美子も立って、台所へ行き、熱いスープを茶碗にいれようとした。

その時、将之介の声が聞こえた。「ああ、こいだ、こいだ。」

「あ、そこは違います。トイはあつち、あつち。あつち！熱い！」

熱いスープの入った茶碗が登美子の手から落ちた。茶碗が割れた。登美子は急いで将之介

「ええ、ええ、ゆうちゃんはおばあちゃんとの家にいましょう。」と登美子が

言った。

「あなたもここにいでしょうか。」と将之介が竜彦にきいた。

「いえ、私は仕事がありますから、お葬式が終わったら北海道へ帰ります。」

「帰る？北海道へ？葬式が終わったら、将之介はよくわからないようだった。が、

「では、この子を連れて行ってください。」と竜彦に言った。

「えっ？いえ、ゆうちゃんのお母さん、千絵さんがなくなりましたから、私はゆうちゃん

んをこちらへ連れてきました。明日、千絵さんのお葬式ですね。お葬式が終わったら、私

はひとりで北海道へ帰ります。」

将之介は怖い顔をして言った。

と大きいかばんを持った竜彦が出てきた。「お母さん、九州に着いたよ。」とゆう子は白
くて小さい箱に話しかけた。

一人は空港からバスに乗った。竜彦もゆう子も九州に来たのは初めてだった。

バスを降りて二人は古い大きな家の前に立った。ゆう子がドアを開けようとした時、中か

ららり、0歳の女の子が出てきた。髪が少し白くなっているが、千絵に似たきれいな人

だ。千絵の母、登美子だ。

「あっーゆうちゃん！よく来たね。大変だったね。」登美子はゆう子を抱いた。それから

竜彦を見て、「本当にお世話になりました。すみませんでした。」

あの、主人が出かけてしましまして。今、警察から電話がありましたので、主人を迎え

に行ってきます。ゆうちゃん、疲れたでしょう。冷蔵庫の中にジュースが入っているから

飲んでね。」

登美子はそう言いながら、黄色い車に乗って出て行った。

竜彦は何がおこったのかわからない。ゆう子が話した。

「おじいちゃんは頭の病気なの。だから一人で出かけると、帰れなくなるの。おじいちゃんが出かけると、おばあちゃんは探さなければならない。大変なの。」

「そうか……。それは大変だなあ。」

小さいゆう子がこの人たちと、九州にいろんことできるだろうか？ 竜彦は心配になった。

夜、竜彦はゆう子といっしょに食事をしている。登美子もいっしょに食っている。千絵の父

でゆう子の祖父、将之介もいっしょだ。将之介の髪は真っ白。

将之介は竜彦とお酒を飲んでいる。

竜彦が言った。

「九州は暖かいですね。北海道はまだストーブを使っています。」

「はあ。あなたは北海道からいらつしやいましたか？」

「おじいちゃん、このおじいさんは北海道から私を連れてきてくれたのよ。」とゆう子が言った。

「うん。おお、千絵、いつ帰ってきた？ 千絵は北海道へ行ってたのか。」

竜彦はびっくりして将之介を見た。登美子は困った顔をしている。

「おじいちゃん、私はゆう子。」

「うん？・・・あ、ゆう子、ゆう子か。よく来た、よく来た。千絵はどこだ？」

ゆう子はちよつと心配そうに登美子を見た。が、

「おばあちゃん、私、この家にいてもいい？」と言った。